自分と違う生き方と出会う

まなぶ　時代の変化への対応

大きな時代の変革期には現実の変化に意識が追い付かない。例えば「専業主婦」は普通だと思われていたが、女性の就労が進んでくると多様な生き方の中のひとつの形だと気付く。「高齢者」や「退職者」にも同じことが言える。

すでに65歳以上の人口は24％を超え、今後総人口が減少する中で高齢化率は上昇し、2030年ごろには50歳以上が人口の半数を超えると予測されている。紋切り型のように聞かされる日本の人口動態の予測である。そこから引き出される将来像も展望が描きにくい。

頭でわかっていることと実感とが結びつきにくく、漠然とした不安だけが残る。いきおい健康と生活に困らない経済力が願望となるから、これは一種の不安スパイラルで、ますます出口が見つけづらくなる。

そこで、もう一つの重要な条件を挙げたい。何かをしようとする「意志」である。退職すると一挙に空っぽになりやすい代物である。あるいは、空っぽになったことに気付かない。

これは知識ではなく、意識の問題だ。実感が乏しくなるのは当然のことであろう。

人口動態を含め私たちは何が変わるかは知っているのだが、人生で培ってきた価値観、考え方を再検討することは少ない。これは自然なことではあるが、変わる予測を変わらない部分（自分自身）を前提に理解することになる。

これからの時代もっとも変わりうるもの、それは「高齢者」「退職者」と呼ばれる人たち自身であろう。社会老年学の知見は、歴史的にみても社会的にみてもこの集団がもっとも多様性に富んでいることを示してきた。しかし皮肉なことに高齢化が進んだ現在、自由でありながら窮屈な生き方になってしまっている。

では、どうしたらよいか。自分にとっての自明性の世界に気付くことで、それには「異質なもの」を経験することである。広い意味でのカルチャーショックの効用で、自分と違う多様な生き方、考え方、人生経験をしてきた人との出会いである。そうした社会的な場と機会の創出に真剣に取り組む必要がある。

人生後半期におけるまなぶことの意味はこの点にある。そして、これは最高に贅沢なことかもしれないのである。

（立教大教授　木下康仁）